

# Mon Nara



Numéro306 Association Franco-Japonaise de Nara 奈良日仏協会

OCT. 2024 10月号

## 奈良日仏協会創立 30 周年記念パーティー開催

奈良日仏協会は 1994 年に創立され、本年 30 周年を迎えることとなりました。この記念すべき年にあたり、来賓の方々を交え、会員の皆様が集う祝賀会を下記のとおり開催することといたしました。

日時：11月24日（日） 11：30～14：00

場所：奈良ホテル 新館 4F 大和の間

25 周年の際は、生駒市コミュニティセンター文化ホールにおいて、会員による音楽活動披露を中心とした催しと懇親会を実施しましたが、今回は、奈良を代表するホテルにおいて、着席スタイルによるフランス料理のコースをフランスワインとともに味わっていただき、会員同士の親睦を深めていただこうと企画しました。来賓として、奈良県知事の山下真氏、21 世紀の森 空中の村代表フェレリ・ジョラン氏から、ご挨拶を頂戴したいと考えております。

また記念式典にふさわしい美しく静謐な名曲、フォーレ作曲「ラシーヌ讃歌」を、会員有志らによる混声四部合唱でお届けする予定で、7 月よりメンバーが鋭意練習に励んでおります。必ずやお楽しみいただけることと思います。

会場では、会員の方々より、設立時のエピソードなど協会活動についての思い出を語る場も設けており、貴重なお話が伺えるまたとない機会となるでしょう。

皆様お誘いあわせての多数のご参加をお待ちしております。申し込み要領は、下記の囲みをご覧ください。

◆奈良ホテル（〒630-8301 奈良市高畑町 1096 TEL 0570-66-6088 ナビダイヤル）への交通案内：

JR 奈良駅より：タクシーで約 8 分。東口一番のりばから奈良交通バスで約 15 分、奈良ホテルバス停下車徒歩 1 分。  
近鉄奈良駅より：徒歩約 20 分。タクシーで約 5 分。3 番のりばから奈良交通バスで約 8 分、奈良ホテルバス停下車徒歩 1 分。  
(杉谷健治)

◆◆「創立 30 周年記念誌」の発行：当初は奈良日仏協会「創立 30 年史」の作成を目指して編集に取り組んできましたが、Mon Nara のバック・ナンバーが全号保管されておらず、「創立 30 周年記念誌」に切りかえての発行を目指しています。現在も行われている行事や活動については、できるかぎりその始まりと継続の歴史を明確にしたいと思っております。11 月 24 日（日）に開催される奈良ホテルでの記念祝賀会についても掲載いたします。Mon Nara 通信 12 月号とともに、年内に会員の皆様のお手元にお送りする予定です。  
(浅井直子)

◆参加申込は **10 月 31 日**までに 次のいずれかにお願ひ致します。

**E-mail : sugitani@kcn.jp (杉谷) Tel : 090-6322-0672 (杉谷) Fax : 0742-62-1741 (三木)**

◆30 周年記念祝賀会 着席 会食 (定員 56 名) 参加費 会員 5,000 円 一般 6,000 円

参加費は当日会場で頂戴致します。定員を超えた時点で、参加申込受付を終了しますので予めご了承願ひます。なお、懇親会にいったん参加申し込みされた後に欠席される場合は、11月22日夕刻までに、懇親会幹事 090-6322-0672 (杉谷) にお電話ください。それ以降の欠席ご連絡、または連絡なしに欠席の場合は、後日、参加費を徴収させて頂きまますので、ご了承ください。

第63回 奈良日仏シネクラブ例会（6/30）報告

◆◆ルイス・ブニュエル監督の『小間使の日記』は今回初見だった。フランス復帰後の初めての作品でジャンヌ・モロー主演。右派と左派の分裂が激化する政治状況にあった1930年代半ば、パリからやってきた小間使が狂言回しとなって、ブルジョア家族とその周辺の人々の奇妙な生活を覗き見る。いかにもブニュエルらしいブルジョワ風刺と社会批評性がみえてくれる。しかしそれ以上に、原作のオクターヴ・ミルボーの小説では1900年だった設定を、映画製作時のドゴール政権下の1964年に、ファシズムが台頭する時代に、ブニュエルが変更したことに、意図的な政治的メッセージを強く感じる。若き日のブニュエルはスペインで左派側で参戦するが敗北して国外逃亡している。

映画では、幼女の暴行惨殺シーンを走る猪と振り返る兎で描写しているが、これは右派と左派の、邪悪な者の勝利の暗喩なのか、ファシズムの勃興に警鐘を鳴らしているのか。1964年、ジャンヌ・モロー演じる小間使も奇怪な世界に同化していくが、冷静な立ち位置でいた人も飲み込まれてしまう時代の空気が描写されている。フランス時代のブニュエル作品の中で最もリアリスティックな作品だ。フェティシズムの表現はあるが、合理的な意味解釈を拒否したり、混乱させるような描写は見られない。自然や動植物の描写が印象に残る。

本作品はまた、ジャン＝クロード・カリエールとの記念すべき共同脚本1作目でもある。1963年に会って83年にブニュエルが没するまでの約20年間、『小間使の日記』から始まるフランス制作の7作品のうち6作までが、カリエールとの共同脚本である。

ここで、カリエールの盟友ピエール・エテックスについても、ぜひ紹介したい。1961年、短編映画『破局』で監督デビュー。エテックスと共同で脚本を執筆したカリエールもこの作品で脚本家デビューした。この短編がカリエールが、『小間使の日記』の共同脚本家としてブニュエルに抜擢されるきっかけになった。続いて制作した短編『幸福な結婚記念日』でアカデミー賞短編映画賞を受賞。続く1962年『女はコワイです』1964年『ヨーヨー』を制作。1965年、第18回カンヌ映画祭に監督主演作『ヨーヨー』が出品され、当時ゴダールが絶賛した。2007年第60回カンヌ映画祭では、カンヌ・クラシックス修復版として公開された。これらの映画は全てカリエールとエテックスの共同脚本である。同時期にカリエールがブニュエルの映画の共同脚本を執筆していたことが、何らかの化学反応を起こし作品に影を落としているのでは、と思いたくなる。エテックスの作品がブニュエルのだと評されることもあるが、それも化学反応のせいかな？ 本国フランスの法律上の権利問題が理由で長らく劇場公開されず、ソフト化もされていなかったが、ゴダールやレオス・カラックス、デヴィッド・リンチなどの映画人と映画ファンによる5万人以上の人々が署名活動に協力して、裁判で勝訴した。その結果、ほとんどの作品がエテックス本人の監修でデジタルリマスター化され、多くの国で上映が実現し、以降エテックス再評価が格段に進んだ。わが国でも昨年、劇場で回顧上映会が開催された。6月末の『小間使の日記』の例会の3ヶ月後、9月末の『自由の幻想』の例会の折に、ピエールさんに訊ねてみたら、「エテックス最高」と言っていた。（吉村公彰）



コラム：《ルイス・ブニュエルの映画人生》

1900年スペイン生まれのブニュエルは、文字通り20世紀を象徴する人物、映画の時代の申し子といえる。フランス、スペイン、アメリカ、メキシコ、そして再びフランス。異なる言語や文化の土地で映画を作り続けた。様々な人との協働、闘い、様々な場所での経験や洞察。彼の歩んだ人生が彼の作品に色濃く反映されている。マドリードの学生時代、後に詩人になるガルシア・ロルカや画家になるサルバドール・ダリと交友し、25歳でパリに出て批評を書き映画撮影所に入りし、シュルレアリスム運動に出会う。スペインでダリと二人で脚本を書き、パリで『アンダルシアの犬』を撮影。さらに二人は『黄金時代』を撮るが、右翼がスクリーンに向かって爆弾を投げつける事件が起き50年間公開禁止。スペインに戻ってドキュメンタリー映画の傑作『糧なき土地』を撮影。スペインの最貧地方の生活を描いて、ファシスト達の愛国的反発を誘発しこれも公開禁止になり、フランコ政権下で指名手配される。アメリカに渡って反ファシズム映画を集める仕事をし、メキシコに移って、社会主義リアリズム映画の傑作『忘れられた人々』がカンヌ映画祭監督賞受賞、メキシコでは多種多様な映画を撮る。1961年にスペインに招かれて『ビリディアナ』を撮影。スペイン映画で初のカンヌ国際映画祭グランプリを受賞するが、乞食たちが最後の晩餐のパロディーを行うシーンがスキャンダルを巻き起してスペインとイタリアで上映禁止。1963年以降フランスに招かれ、ジャンヌ・モロー主演『小間使の日記』(1964)、カトリーヌ・ドヌーヴ主演『昼顔』(1967)『哀しみのトリスターナ』(1970)などの耽美映画を撮り、その後自らの原点となったシュルレアリスム精神を発揚させた作品を撮る。限りない人間の欺瞞・善意・情熱を吸収し、風刺と笑いにかえ、精神の自由を貫き、「人間」を愛したブニュエル。1983年メキシコシティで83歳の生涯を閉じた。(浅井直子)



秋の教養講座（9/22）報告

◆9月22日（日）、奈良日仏協会会員でパリ在住のピエール・シルヴェストリさんによる秋の教養講座を、生駒セイセイビルにおいて開催し、22名（うち一般7名）にご参加いただきました。通訳は林薫子さん。ピエールさんが、2007年から2011年の奈良滞在時に撮影した映像の鑑賞と解説の後、会員からの感想や質問が寄せられました。映像は、ピエールさんが初めてトラクターに乗って農作業をする場面と奈良の風景の二つが、時系列も順不同に交互に映し出されるもので、最初は意図がよく理解できませんでしたが、ネットの速過ぎる映像に対抗したかったとか、古い町並みと近代的商業的な建物の混在や、伝統文化と同時にヒップホップを写すなどコントラストを意識したとの解説で腑に落ちました。会員からは、紅葉や夕陽、雲、雨の雫が美しかった、映像詩になっているとの感想があり、また力強い仁王像が2回映し出されていたが、これはピエールさんが男として成長したことを暗示する意図があったのかという質問に対して、意図はしてなかったがそういう意味もあるかなと今思うとの答えがあり、映像が時系列になっていないのは何故かという質問には、奈良にはフランスの時間とは違った時間の流れがあることを表現したかったからと答えられていました。奈良からフランスに戻ると、創作欲が泉のように湧くとのこと。奈良を訪れると、デジャ・ヴュを感じるとも言われていましたが、もしかしてピエールさんは、奈良時代の古人の生まれ変わりではないでしょうか。（杉谷健治）

◆ピエールが見せてくれた映像には、奈良の風景と天理の情景があった。奈良には観光巡りのように、興福寺、平城京、東大寺、お水取り、鹿、紅葉が映っていたが、対照的に天理にあるのは、日常の家族との生活（農作業、お盆の光景）だった。特に農作業では、只管、苗をセッティングし、トラクターで田圃を行きつ戻りつするシーンが繰り返された。見終わった後に、ピエールが「農作業は très dur et répétitif」だと言っていた。一見すると、冗漫なこのシーンがそのことを物語っていたのだと知り、ピエールの意図が少し理解できたような気がした。また、このシーンは、あまりにも目まぐるしい現代へのアンチテーゼでもあるらしい。2007年～2011年という、この頃には既にスマートフォンもあった。生活はどんどん便利になっているのに、農作業のシーンは、私が昭和50年頃に父親の田舎で見た光景とあまり変わりがなかった。この新旧の共存こそが、奈良の魅力なのかもしれない。（藪田章恵）

◆当協会元会員でかつてピエールと一緒にシネクラブ活動を支えてくれた寺本さん夫妻（仙台在住）がたまたま関西に来ていて、この日の行事に参加してくださったり、かつてピエールからフランス語を習っていた方たちが駆けつけてくださるなど、嬉しいサプライズがありました。フランスから初来日のお父様も参加され、会場にアットホームな雰囲気はただよう中、昨年のアラカルト同様、林薫子さんのテンポのよい通訳の助けを借りて、ピエールの自作映画と解説を通して、彼の奈良愛を十分に感じる事ができました。（浅井直子）

◆Un nombre incalculable de fois ont raisonné dans ma tête les mots suivants : « Nara, je t'aime ». Il m'est même arrivé de les prononcer à voix haute. Dire que cette cité fait partie intégrante de moi ou plutôt qu'elle m'a définitivement happé est un euphémisme. Présenter mon film *Nara, mon amour* au regard du public de cette ville a constitué un moment plein d'émotion qui m'a bouleversé, d'autant plus que mon père était présent dans la salle. Les commentaires chaleureux remplis de bienveillance des participants m'ont touché de manière indélébile. Citoyens de Nara, je vous aime ! (Pierre Silvestri)  
 「奈良、愛しています」という言葉が私の頭の中で何回も響きました。大きな声で口にするもありました。この町は私にはなくてはならないもの、あるいは私を永久に魅了したと言っても過言ではありません。この町の人を観客に、私の映画『奈良、私の愛』を紹介することは、父がその場にいたのでよりいっそう、心が揺さぶられ感情の溢れる瞬間でした。参加者の皆さんの温かく思いやりのあるコメントに、忘れがたいほど感じりました。奈良の皆さま、愛しています！（ピエール・シルヴェストリ）



### 第64回 奈良日仏シネクラブ例会 (9/29) 報告

◆◆ピエール・シルヴェストリさんの解説で、ルイス・ブニュエルの『自由の幻想』(1974)を観た。感想を一言で言うならば、ロートレアモンの言葉を引用したい。「解剖台の上での、ミシンとこうもり傘の偶然の出会いのように美しい(『マルドロールの歌』第六歌)」。まさに偶然の出会いが連なった映画であった。『自由の幻想』はルイス・ブニュエルの最晩年の作品であり、最初期の『アンダルシアの犬』(1929)と関連させて観ると、その完成型ではないかと思われる。モーツァルトを愛する私は、ト短調の交響曲、第25番と第40番の関係のようなものではないかと考えている。エロスとタナトス(性の欲動と死の欲動)は、フロイトが文明批判に使った武器である。『自由の幻想』においても、ルイス・ブニュエルは、このエロスとタナトスを、通奏低音、いや執拗低音として、最初から終わりまで使っていた。(角田 茂)

◆◆学生の頃授業で『アンダルシアの犬』(1929)を見たことから、ルイス・ブニュエルの映画には興味がありました。彼はジャン・エプステイン監督の『アッシャー家の末裔』(1928)の助監督をしていた時に、アベル・ガンズ監督の映画『ナポレオン』(1927)を批判してクビになり、その後ダリと協力して『アンダルシアの犬』を撮りました。私が読んだ本によると、次作の『黄金時代』(1930)の最初の上映会場で、右翼によってホールの入口に展示していたダリなどのシュルレアリスム絵画が破壊され、スクリーンは青のインクで汚されました。このことは、パンクロックのジョン・ライドン(セックス・ピストルズ)が、当時の女王陛下を皮肉った曲「ゴッド・セイヴ・ザ・クイーン」を発表して、ある日愛国者に襲われ重傷を負ったことと似ています。

今回の『自由の幻想 *Le Fantôme de la liberté*』は、タイトルに「ファントム *fantôme*」という語が入っているので、「幻想」は実は「幻影」なのではないかと思っているうちに、上映が始まりました。冒頭ナポレオン軍がスペインの反乱軍を処刑しようとする時「自由くたばれ」と叫ぶ男。シュルレアリスムの影響で偶然の連続でつながっていくストーリーが意識下の流れを表しているようで、神秘さを醸し出していました。そして、随所にばらまかれた皮肉が気が利いています。娘が目の前にいるのに搜索願を出す親のナンセンスさ。ある男が高層ビルから無差別に銃を乱射して死刑判決を受けた直後に手錠がはずされ、まるでヒーローのように扱われるブラック・ユーモア。警視総監が死んだ妹から電話がかかってきたので墓場に向いてみると、棺桶の横には受話器があるというオチ。支離滅裂なようでいて、場面場面は違和感なくつながっている。こうした作品を観ていると、主人公が誰だかはっきりせず、最後に主人公が判明する夢の世界のような『アンダルシアの犬』を思い出します。つまり「オートマチズム」の手法で撮られた彼の出発点の作品に戻っているのです。ダリとの説明不能なギャグの追求から始まった彼のイメージは、今なお私を捉えて離しません。(泉 荘太)

◆◆いったん行方不明になった娘が目の前に戻っているのに搜索願を出した親の逸話には、子供のことを心配するポーズをとりながら肝心の子供の言うことには無関心で、問題を教師や警察の権威筋にゆだねようとする大人たちへの風刺がこめられていること。ジャン・クロード・ブリアリ、モニカ・ヴィッティ、ジャン・ロシュフォール、ミシェル・ピコリ他のフランスやイタリア映画のスター俳優たちがたった数分の出演で、しかも滑稽な役を演じていること。動物の眼差しを映し出して、人間と動物を同じ次元の存在とみなしていること、等々。そうした点にブニュエル作品の懐の深さを感じるというピエールさんの指摘に、なるほどと感心しました。(浅井直子)

◆◆Luis Buñuel est l'un de mes cinéastes de chevet. Son cinéma ne me quitte jamais. Parmi sa filmographie, *Le Fantôme de la liberté* me tient particulièrement à cœur. L'idée que la liberté est comme un fantôme que l'on essaie d'attraper en vain me séduit puissamment. Buñuel n'est pas dans le bataillon des pessimistes qui pullulent à notre époque, il fait simplement preuve d'une belle lucidité. Il ne se met pas au-dessus de ses personnages et ne porte aucun jugement sur eux. Son film ne cherche pas à démontrer quoi que ce soit, il permet de mieux appréhender l'humain en le tournant en dérision. Vive la liberté incarnée par ce réalisateur ! ルイス・ブニュエルは私の愛する映画作家の一人で、彼の映画は私をひきつけてやみません。とりわけ『自由の幻想』には思い入れがあります。自由とは、つかまえようとしても空しい幻影のようなものという彼の考えに、私は強くひかれます。ブニュエルは、現代たくさんいる悲観主義者たちの一群には属さず、ひたすら見事なまでの明晰さを示してくれます。彼は上からの視線で登場人物たちを批判することはありません。彼の映画は何かを実証しようとするのではなく、人間をからかうことによって、人間をより深く理解させてくれるのです。この映画監督によって具現化される自由万歳！(ピエール・シルヴェストリ)





## 「奈良フランス語クラブ」時代の仏作文

野島正興 (のじま まさおき)

ことし奈良日仏協会創立 30 周年を迎えるにあたって、創立以前の時代の思い出を紹介することにします。私は奈良日仏協会の前身となった「奈良フランス語クラブ」の例会に、たぶん 1990 年の途中から参加するようになったように思います。今となっては正確には思い出せないのですが、当時例会で発表されたフランス語作文をまとめた作文集《POT-POURRI》を、最近になって参照する機会があり、1991 年 5 月 25 日に発行された第 4 号に、「Mon histoire de l'étude du français (私のフランス語学習の歩み)」というタイトルの私の作文が、4 回にもわたって掲載されていることがわかりました。それらは連載で、おそらくその続きも例会で発表していたのかもしれませんが。

ここに、《POT-POURRI》第 4 号に掲載されている第 1 回の作文を転記します。私が NHK に入局して 3 年目、帯広放送局にいた頃のことです。



La troisième année que je travaillais à la NHK, j'étais à Obihiro, c'est alors que j'ai vu Monsieur Isomura présenter le nouveau journal télévisé, 'NEWS CENTER NEUF' qu'il venait de créer. Il avait un style très nouveau qui n'était ni à la japonaise ni à l'américaine. Il venait de rentrer de France après un long séjour. J'ai trouvé son style extraordinaire.

Jusqu'alors, les émissions d'informations étaient réalisées par la coopération de deux personnes : un journaliste qui ressemblait les information et rédigeait un texte, et un annonceur qui lisait ce texte.

Dans le nouveau journal télévisé de M. Isomura, il se chargeait lui-même des deux parties du travail. J'ai pensé qu'à l'avenir toutes les émissions d'informations seraient de ce style. Je me demandais comment faire pour réaliser des émissions de ce genre. J'avais conscience qu'il était absurde d'imiter superficiellement M. Isomura.

J'ai pensé que dans cette nouvelle façon de présenter les informations, la personnalité du journaliste-présentateur était un facteur primordiale, et qu'en cas de M. Isomura la connaissance du français et de la France avait dû jouer un grand rôle dans la formation de sa personnalité.

Cela m'a donné envie d'apprendre le français, mais comme je venais seulement de commencer à travailler j'étais trop occupé pour m'y appliquer. D'autre part, je ne pouvais faire que ce que mes supérieurs me disaient, et j'y mettais toute mon énergie à Obihiro.

NHK に入局して 3 年目、帯広にいたとき、磯村（尚徳）さんがはじめたばかりの新しいテレビニュース番組「ニュースセンター 9 時」を紹介しているのを見ました。磯村さんは日本でもアメリカでもない、とても新しいスタイルを持っていました。長期滞在を終えてフランスから戻ったばかりで、そのスタイルは素晴らしいものと思いました。それまでのニュース放送は、ニュース原稿を書く記者と、その原稿を読み伝えるアナウンサーの二人の協力によって制作されていました。磯村さんの新しいニュース番組では、両方のパートを自分で担当していました。私はこれからのニュース番組はすべてこうなるだろうと思い、こうした番組を作るにはどうすればいいのか考えました。磯村さんを表面的に真似するだけでは意味がないと思っていました。この新しい伝え方については、ジャーナリスト兼プレゼンターの個性がもっとも大事な要素であり、磯村さんにおいてはフランス語とフランスの知識が、彼の人間性に大きな役割を果たしたに違いないと思いました。それがきっかけで、私はフランス語を学びたいと思うようになりました。しかし、当時は入局したばかりで忙しく、フランス語学習に取り組むことができず、私は先輩に言われた仕事をするのに精一杯でした。

これが 1990 年当時、私が奈良放送局に移動になって間もない頃（40 代前半）に奈良フランス語クラブに入会して、例会で発表した仏作文です。どなたかに添削してもらったとは思いますが、それから 34 年後のいま読み返してみると、この作文を書いたときの記憶が蘇ります。奈良フランス語クラブでは、本当にいろんな人たちとの出会いがあり、それが奈良日仏協会の創立につながりました。人との出会いはとても大事なことだと、あらためて実感しています。

## 随想「ジャン=ポール・サルトル」

角田 茂 (つのだ しげる)

L'existence précède l'essence. 実存は本質に先行する。

ジャン=ポール・サルトル (Jean-Paul Sartre : 1905-1980) 著 『実存主義はヒューマニズムである』より

『団塊の世代』とは、1947年から1949年のベビーブーム期に生まれた世代のことで、堺屋太一により命名された。これに相当するフランス語は『68年世代 (soixante-huitard)』もしくは『5月革命世代 (génération de la révolution de mai)』である。私は1948年生まれで、団塊の世代である。パリ留学中、同世代の数学者と友人になった。学生時代、サルトルを読み、全学ストライキとデモをするなど、共通の経験があり意気投合した。10年前、長男を連れて来日した時、私は彼らを奈良に案内し、自宅で妻の日本料理をご馳走したが、最後に我々は、フランス語で『インターナショナル (L'Internationale)』を歌った。この『インターナショナル』、パリ・コミューンの直後に作られた国際的労働歌・革命歌で、フランスでは五月革命の時に歌われ、日本では全共闘のデモの時に、日本語で歌われていた。したがって、私は留学中すぐにフランス語で歌うことができるようになった。

フランス語の“*existentialisme*”を『実存主義』と日本語に訳したのは、哲学者、九鬼周造である。彼のフランス留学中における家庭教師は、学生時代のサルトルであり、『実存主義』とはまさに名訳である。私が初めて読んだサルトルの作品は、白井浩司訳の『嘔吐』であった。原題は“*La Nausée*”であり、本来『悪心 (吐き気)』と訳すべきものである。臨床医学の世界では、悪心 (仏: *nausée*, 英: *nausea*) と嘔吐 (仏: *vomissement*, 英: *vomiting*) とを厳密に区別している。悪心の中枢は前頭前野にあり、悪心の感情を作り出し、嘔吐の中枢は延髄にあり、嘔吐の機械的運動のみを指示する。脳腫瘍等、頭蓋内圧が亢進した時に起こる症状は、悪心を伴わない嘔吐であり、主人公ロカントンの経験した症状は、嘔吐を伴わない悪心である。ロカントンの悪心に関し、私はまだ納得できる説明を読んだことがない。我々は身の回りに存在するものを見る時、五感を通して入力された情報すなわち実存 (ただそこにあること) と、前頭前野で判断された本質 (存在の目的) の両方を同時に認知し、理解している。たとえば、我々が自分の手を見る時、そこにあるという実存と同時に、身体の一部で5本の指を使っているいろいろな作業をするという本質を理解する。ところが、手首から切断された手を見ると、我々は本質なき実存と出会い、悪心を催す。公園でマロニエの木の根を見ている時に起きたロカントンの悪心は、何らかの脳機能変調により、本質を伴わない実存に出会ってしまったからではないか、と私は考えている。

長編小説『自由への道』、原題は“*Les Chemins de la Liberté*”である。ナチス占領下のフランスにおいて、“*les chemins de la liberté*”とは、ユダヤ人がピレネー山脈を徒歩で越え、スペインに脱出する秘密の経路であった。この小説の舞台背景は、ミュンヘン会談からドイツ軍によるパリ占領、すなわち1938年から1940年頃である。主人公のマチウはサルトル自身、共産党員の友人ブリュネはポール・ニザン (Paul Nizan: 1905-1940) をモデルにしていると言われる。学生時代、いかなる党派にも属さず、自分の頭で考え、その都度、全共闘やベ平連のデモに参加していた私は、ブリュネから共産党への入党を勧められても、頑に拒否し続けたマチウに共感しながら、この作品を読んだことを憶えている。私は大学3年から学生運動には、いっさい関与していない。

1966年秋、サルトルはボーヴォワール (Simone de Beauvoir: 1908-1986) を連れて来日し、慶応大学、日比谷公会堂、京都会館で公演した。これら3つの講演はまとめられ、後日、『知識人の擁護 (*Plaidoyer pour les Intellectuels*)』というタイトルで出版された。彼の講演によると、『知識人』なる言葉は、19世紀末、ドレフュス事件の時に、はじめて登場した。無実のドレフュス大尉は、軍法会議でスパイとして有罪判決を受けた。そこでエミール・ゾラをはじめとする作家たちは、ユダヤ人の彼を擁護するために結集した。その時、彼らに対して与えられた蔑称が『知識人』であった。しかし彼らは、あえてその蔑称を自らのものとして闘った。サルトルによると、何らかの分野で専門的な知識を有する者が『知識人』ではない。専門的な知識を有する者が、あえて専門外の事柄に口を出し、『異議申し立て』という行為をすることにより、はじめて『知識人』となる。

冒頭の「実存は本質に先行する」は、無神論的実存主義の存在論である。職人がペーパー・ナイフを作る時、まず本質が先行し、その後、ペーパー・ナイフが実存する。すなわち、「本質は実存に先行する」である。しかし、我々人間は、まずこの世の中に誕生し、実存する。本質は、その後の人生を通して自分自身で作るという考えである。従って我々が『知識人』として生きるかどうか、我々自身の選択となる。





印象派とモード

村田京子(むらた きょうこ)

3月の美術クラブ例会では、中之島美術館の「モネ展」に行き、モネの風景画を鑑賞しました。モネを始めとする印象派は、戸外での制作を特徴とし、時とともに日の光が変化していく様子を捉えた風景画で有名ですが、もう一つの特徴として、日常生活を題材にしたことが挙げられます。この当時、神話や聖書から題材を取った歴史画を描くアカデミー画家が主流で、それに対抗して、印象派の画家たちは近代都市パリの現代生活の一コマを切り取り、絵にしました。題材として取り上げたのは劇場や鉄道駅などで、最先端のモードも含まれ、モード誌に添えられた図版(ファッション・プレート)を印象派の画家たちが参照したことは、よく知られています。例えば、セザンヌの《散策》(図1)は、ファッション・プレート(図2)をもとにしたもので、絵の構図や服装もそっくりで、現在ならば「剽窃」とみなされるかもしれません。



図1 ポール・セザンヌ《散策》(1871)

モネにも、最新流行の衣装を纏った女性たちを描いた作品《庭の女たち》(図3)があります。この絵が何を意味するのか、少し読み解いてみたいと思います。この絵では、どこかのお屋敷の庭でくつろぐ四人の女性が描かれています。まず注目すべきは、女性たちがそれぞれ違う方向に視線を向けていて、女性同士の親密な交流が見られないことです。それは一つには、後にモネの妻となるカミーユが、四人の女性すべてのモデルを務めたためでありましょう。さらに、女性たちが「ファッション・プレートが衣装を見せるために用いた硬直したポーズ」(ヴァージニア・スペイト)で描かれていることもその一因です。確かにファッション・プレートの目的は、最新流行の衣装を紹介することであり、人物は言わば、マネキン人形に過ぎません。マネの女性たちの表情が乏しいのも頷けます。



図2 『ラ・モード・イリュストレ』1871年5月7日号、「散策着」

絵の中の三人の女性たちは、鮮やかな白の衣装を着ています。それは19世紀に開発された新しい染物技術の賜物で、高価であるばかりか、その純白を汚さないよう細心の注意を払い、あらゆる肉体労働を避けねばなりません。したがって白の衣装は、働く必要のない金持ち階級のステイタスを表す象徴となりました。バージット・ハースはこの絵に関して、次のように指摘しています。

細心の注意を払って再現したエレガントな衣装——その拘束的な形と繊細な生地のために身体活動はすべて禁じられている——によって、彼女たちは装飾的で消極的な特徴を持つ社会的ステイタスの象徴となる。彼女たちが誇示する余暇——身に纏う美しい服によって条件づけられ、適合した余暇——がこうした印象を強めている。[...]そこに、当時のブルジョワ階級に典型的な、家父長的な女性観の反映を見出すことができる。言い換えれば、一人の女性の外見、行動や生活の枠組が彼女の夫や愛人の社会的・経済的威光のバロメーターの代わりとなっていた。[下線筆者]

このように、モネの絵には、妻を働かせずに妻子を養うことが男のステイタスと考える家父長的な価値観が反映され、着飾った女性たちは「夫や愛人の社会的・経済的威光のバロメーター」となりました。要するに、女性は「装飾的で消極的な」存在として、男性の一種の付属物であったのです。

服飾史の観点から見れば、フランス革命前のアンシャン・レジーム下では、貴族階級はその特権として、男女を問わず、色鮮やかで贅沢な服装(錦織、羽飾り、シルク、レースなど)を纏い、ルイ14世は赤いハイヒールを履いていたことで有名です。革命後は「服装の自由」が謳われ、誰でも自由に服装を選べるようになります。しかし、産業革命が進展した19世紀後半のブルジョワ社会では、男性服は黒またはグレーなど地味な色になり、黒服の男性は、華やかで贅沢な衣装を纏った女性の引き立て役でしかなくなります。エレガンスは専ら、女性が引き受けることになるわけです。モネの絵は、こうした時代の状況を反映しているとも言えるでしょう。

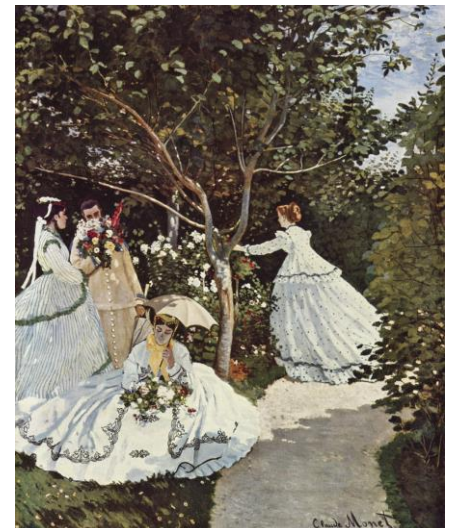


図3 クロード・モネ《庭の女たち》(1866頃)

## Mon Année au Japon 私の日本での一年

トマ・ムノ

Depuis mon enfance, le Japon me fascine, notamment à travers son histoire et sa (pop) culture. Alors, quand j'ai eu l'opportunité d'y aller avec un visa vacances-travail, c'était comme un rêve devenu réalité. En arrivant, mes émotions étaient partagées entre l'excitation de découvrir ce nouveau monde et l'anxiété liée à ce grand changement. Mais, malgré les différences entre la France et le Japon, je me suis rapidement senti "chez moi", particulièrement dans le quartier où je vivais, à Uda.

La langue a été le plus grand défi. Je suis arrivé avec très peu de connaissances en japonais, et chaque interaction était une petite bataille. Heureusement, au fil du temps, j'ai commencé à comprendre et à communiquer. Parmi les nombreuses choses que j'ai adorées au Japon, la cuisine arrive en tête. Elle est unique et offre des saveurs que je n'avais jamais rencontrées ailleurs. Et puis, il y a les onsen. Ces bains thermaux, bien qu'étranges au début, sont rapidement devenus une de mes activités préférées. L'une des choses qui m'a également frappée est l'attachement du Japon à ses traditions, comme porter un kimono pour des occasions spéciales. C'est quelque chose que j'admire beaucoup et que j'aimerais voir plus souvent en France.

Durant mon année au Japon, j'ai eu l'occasion de voyager dans plusieurs régions : Kyoto, Nara, Kinosaki, Shimoda, et même Kyushu. Chaque endroit avait son propre charme. J'ai particulièrement apprécié les routes pittoresques, les visites de sites historiques, et j'ai même eu la chance d'apercevoir le Mont Fuji lors d'un de mes voyages. Mais c'est surtout la rencontre avec l'Histoire qui m'a marqué.

Visiter le mémorial de Nagasaki ou encore le château de Himeiji sont des moments que je n'oublierai jamais. Pour ceux qui rêvent de vivre une telle aventure, je dirais de foncer sans hésiter. Ce voyage m'a changé et m'a donné envie de découvrir encore plus de pays, et bien sûr, je rêve de revenir au Japon, d'y développer mes propres projets, et de voir jusqu'où cette aventure peut me mener. (Thomas Mounot)

子供の頃から、特に歴史と（ポップ）カルチャーを通じて、日本は私を魅了してきました。ですから、ワーキングホリデービザで日本に行く機会を得たときは、夢が叶ったような気分でした。到着したとき、この新しい世界を発見する興奮と大きな変化に伴う不安に、気持ちが二分されていました。しかし、フランスと日本の違いにもかかわらず、とりわけ私が暮らした地域の宇陀で、すぐに「我が家」のように感じました。

言葉が最も大きな試練でした。日本語の知識がほとんどないまま到着したので、人とのやり取りはいつもちょっとした戦いでした。幸い、時間が経つにつれて理解しコミュニケーションし始めました。私が日本で気に入ったことはたくさんありますが、真っ先に思うのは食べ物です。独特で、他では出会ったことのない味わいがありました。そして温泉です。はじめは奇妙でしたが、すぐに私のお気に入りの活動のひとつになりました。他に印象に残ったのは、特別な日に着物を着るなど、伝統への愛着です。それは私がとても感心することで、フランスでもっと見られたらと思います。

日本にいた一年の間に、京都、奈良、城崎、下田、さらには九州など、いくつかの地方を旅行する機会がありました。それぞれの場所にはそれぞれの魅力があります。私は特に趣のある街道や史跡への訪問を楽しみ、旅行中に富士山を見る機会もありました。しかし、最も記憶に刻まれたのは「歴史」との出会いです。

長崎追悼平和祈念館や姫路城への訪問は決して忘れられない瞬間です。そんな冒険的な体験を思い描いている人には、迷わずつき進めと言うでしょう。この旅行で私は変わり、もっと多くの国を発見したくなりました。そしてもちろん、日本に戻ってきて、私自身のプロジェクトを進め、この冒険が私をいったいどこまで連れて行ってくれるのか、見とどけることを夢見ています。



菟田野の神社の祭礼



橿原市おふさ観音



加西市鶴野飛行場滑走路跡地



## 2024年パリオリンピック・パラリンピック観戦レポート

中西さおり

多様性を謳う開会式、セヌ川でのトライアスロン、選手村での食事など、賛否両論を醸し出した2024年パリオリンピック・パラリンピックでしたが、大盛況の下、無事に閉幕しました。オリンピックが始まる前は、メトロの工事、通行止め、切符の値上げ、混雑が予想されるためパリ市内からの移動を促すアナウンスと何かとマイナスイメージが付きまといていましたが、開催中は駅でボランティアスタッフが親切に案内する姿をあちらこちらで見かけ、心配していたよりも大きな混乱もなく人々はスポーツの祭典を楽しんでいるようでした。

今回、フランス教育省もパリ五輪に力を入れていて、学校では子どもたちが世界のスポーツに関する調べ学習をしたり、手作りの聖火トーチを手に校内を回ったり、公式ダンスを踊ったりとオリンピックを身近に感じられる取り組みを行っていたのが印象的でした。“この歴史的なイベントを子どもたちと共有する意義がある”という趣旨でパリ五輪記念2ユーロ硬貨が、フランス全小学生約630万人に配布されました。しかし教員たちは、教育的要素がない上、その予算を教育施設に反映すべきだと、猛反対。大人の事情はさておき、実際に我が子が記念硬貨をもらってきた時は素直に喜んで帰ってきました！

さて、オリンピック開催中は日本に帰国中だった為、ほとんど日本でのテレビ観戦だったのですが、残すところ僅かのタイミングでフランスに戻り、唯一チケットいらずのマラソン競技を見に行きました。手が届く距離で選手を見ることができ、目の前を各国の選手が走り抜けるたびに大きな声援が送られました。マラソン競技が終わった後は実際にそのコースを一般市民も走れるとあり、その日パリ市内がほぼ歩行者天国となっていて、エッフェル塔からアンヴァリッド、グラン・パレ、コンコルド広場へと歩きながら、これらの観光名所が競技場になるパリ五輪はさすがだなと感心せずにはいられませんでした。

パラリンピックはオリンピックに比べると放送回数が少なくマスコミに取り上げられる機会が減少しがちですが、フランスは開催国とあって、パラリンピックもほとんどの競技が放送されていました。比較的安くチケットが購入できたので、車いすバドミントンの試合を見に行くことにしました。競技場近くではボランティアの方々が「フランスの応援国旗はいかがですか。」と無料で旗を配布していたり、顔に国旗のペイントをした人たちとすれ違ったりと盛り上がりを見せていました。会場ではまさに日本対フランスの試合が行われていて、フランスチームの応援の歓声が競技場に響き渡り圧倒されましたが、やはりテレビ観戦とは違い、実際に選手の姿を間近で見ると応援にも力が入り、プレーにも感動しました。ちなみにこの日勝ったのは日本チームです！

ところで、今回のパリ五輪の目玉は何と言ってもチュイルリー公園に設置された聖火台ではないでしょうか。みなさんもお存知の通り、気球の形をした聖火台ですが、パリ五輪の期間中、日中は公園の中で鑑賞することができ、日没になると空へ浮かび上がります。その姿を一目見ようといざ、チュイルリー公園へ。風の影響で10分ほど飛行開始時間が遅れましたが、ゆっくりと空に浮かび上がるその姿はとても雄大で幻想的でした。周りからも「Bravo!」という歓声と共に拍手が湧き上がり見に来ていた人々の心を鷲掴みにしていました。実はこの聖火台、40個のLEDのライトが使われ、霧を放出させて炎に見立てています。本物の聖火は公園内に展示されていました。気球型聖火台は今後もパリの新しいモニュメントとして残して欲しいという市民の声が上がっています。

賛否両論でスタートしたオリンピックですが、歴史的建築物を競技場にしてしまふところは、パリだからこそできた、パリにしかできなかったことではないでしょうか。今までのオリンピック、パラリンピックとは一味違う今回の五輪、特別でパリらしさを感じ、人々を魅了する力があつたのは間違いなしです！



パラリンピック会場



聖火台



パラリンピックシンボル



浮かぶ聖火台

## Au Japon 日本にて

ユバルド・シルヴェストリ

Au Japon, à Nara en particulier, finalement j'y suis venu. Il y a 20 ans, nous recevions de notre fils Pierre des photos du parc de Nara et des temples avoisinants qui faisaient notre admiration. Grâce à lui, guide consciencieux et averti, j'ai pu approcher en 3 semaines quelques trésors patrimoniaux du Kansai et le mode de vie au Japon.

Nara a été notre ville de séjour et Pierre en bon connaisseur des usages et des lieux m'a introduit dans la vie de la cité : aussi elle tient une place particulière dans mon esprit et mon cœur.

J'ai remarqué que les visiteurs viennent y accomplir avec application des rituels profanes et religieux : d'une part, la compagnie des daims et l'offrande des biscuits au cours d'une promenade joyeusement bruyante, d'autre part, les visites dans le silence, parfois la méditation, rendues aux temples Todai-ji avec son inoubliable grand Bouddha, aux sanctuaires de Kasuga Taisha, au temple Shin Yakushi-ji... J'ai eu l'impression qu'on s'y rendait tous en pèlerinage comme au Mont Koya.

J'ai ressenti personnellement un élan de spiritualité du aux circonstances plus qu'à la croyance : devant tant de merveilles situées dans un cadre naturel ou urbain, j'ai éprouvé du respect et aussi de l'admiration tant les édifices, les statues, les ornements, l'environnement en appellent à l'émotion esthétique.

Le contexte de la vie quotidienne a son importance pour le visiteur. Nara se distingue des métropoles comme Kyoto et surtout Osaka en ce qu'elle est à taille humaine, comme Rouen en Normandie où je réside. J'ai apprécié la sympathique gare Kintetsu, véritable poumon de la ville. Et quel plaisir de parcourir le réseau quadrillé des rues commerçantes animées des va-et-vient joyeux voire chahuteurs qui contrastent avec la sérénité des ruelles typiques du centre historique.

Croyez bien que je garderai longtemps en mémoire le gazouillis des oiseaux qui accompagne la traversée des rues. (Ubaldo SILVESTRI)

日本、そして奈良に、ついにやってきました。20年前、息子ピエールから、私たちが憧れていた奈良公園とその周辺の寺院の写真を受け取ってはいましたが、誠実で経験豊かなガイドである彼のおかげで、3週間にわたって、関西の貴重な遺産と日本の生活様式に触れることができました。

奈良に滞在して、慣習や土地のことに通じているピエールが、私をこの町での生活に引き入れてくれました。奈良は私の心の中の特別な場所をしめています。

私が気づいたのは、人々が世俗的かつ宗教的な儀礼を熱心に行うために訪れていることです。楽しくてにぎやかな散歩の途中で、鹿につき合っってビスケットを差し出すかと思えば、他方で、忘れがたい大仏のある東大寺、春日大社、新薬師寺...に行けば、沈黙、時に瞑想しています。高野山のように、人々が巡礼に訪れているような印象を受けました。

信仰よりも状況のなかで精神性の高まりがあることを、私は感じました。自然あるいは都市的な環境の中にあるこれほど多くの素晴らしいものを前にして、敬意と称賛を覚えました。建物、彫像、装飾、周囲の雰囲気美的感情に訴えかけてくるように。

日常の暮らしの背景にあるものは訪問者にとって大切です。奈良は、私が住むノルマンディー地方のルーアン同様、人間に見合った規模という点で、京都や大阪のような大都市とは一線を画しています。町の中心部にある近鉄の親しみやすい駅がとても好きです。楽しそうに往来する人たちで賑わう碁盤目状の区画の商店街の小径を探索するのは、なんと楽しいことでしょう。歴史的な中心地区の路地の静けさとは対照的です。きっと私は、通りを横切るときに聞こえた鳥のさえずりをずっと覚えていることでしょう。



春日大社



平城宮の天井上部



奈良ホテルから見た橋と公園



三条通の小さな寺院



## 幕末の情景を描くフランス語の古書

濱 恵介 (はまけいすけ)

最近やっと読了したフランス語の古書について語りたい。その本の題名は *Le Japon Illustré*、著者はスイス人のエメ・アンペール Aimé Humbert、発行年は 1870 年（明治 3 年）である。著者は幕末の 1863 年にスイス政府を代表する「特使及び全権公使」として来日し、翌 1864 年に日瑞修好通商条約を締結した当人である。約 10 ヶ月間の滞在中に見聞したことの記録と収集した資料をもとに、帰国後この書籍 2 巻を編集・出版した。私が手にして読んだのはその上巻である。

まず本の体裁が印象的で、大きさは B5 版に近く厚みは 4 cm ほど。凹凸のある背表紙はえんじ色の革装で文字・装飾は金の箔押し、中身の天・小口・地 3 面には金付けが施され今も輝く。装丁が少し傷んでいるものの他の劣化は殆どなく、全体として著者・出版当事者の思いを表すような風格を保っている。

本文の記述は、5 ヶ月余の航海ののち上海から長崎へ到着した様子から始まる。地形、街並み、人々の様子など見るもの全てが珍しいようで描写もこまやか。下関から瀬戸内を通過して潮岬（当時の名は出雲崎）をまわり、下田を経て横浜へ到達する。弁天（今も地名として残る）のオランダ公使邸に寓居し日本滞在が始まる。住居、使用人、近隣の人々、神社などの様子が描写される。鎌倉への小旅行ののち、いよいよ江戸へ向かう。

ペリー来航から 10 年後、攘夷思想による外国人襲撃が起きていた当時の緊迫感が、役人同伴による警護から感じられる。船で直接江戸へ行くことは許されていない。途中の風景、寺社、茶屋、市場などがこまかに記されている。地名としては、川崎大師、六郷川、鈴ヶ森刑場、品川宿などが登場。宿舎は高輪にあった長応寺で、オランダ公使館とともにスイスもその一隅を利用していた。

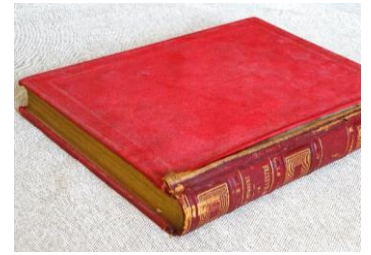
著者は巨大な首都江戸について様々な視点から観察した。地理学的な分析を加え幕府の主要な施設についてそれぞれの機能と共に記録している。江戸城へも行って将軍臨席の儀式を参観したような記述もある。

読書しながら得た感慨の最も大きなものは臨場感だった。多数の細密な銅版画のお蔭で、当時の街並み風景に加え、今では時代劇でしか目にすることは無い二本差しの武士、丁髷・日本髪姿の人々、大道芸等々、著者の視覚と語りを通じて江戸時代末期の情景に直接触れているような感覚を覚えたのだ。訳本は 50 年前に出ており、「幕末日本図絵」上下（雄松堂）が代表例である。しかし、私はフランス語でかつ原著から不完全ながら直接理解した。これを *privilège*（特別な恩典）と言わずに何と表現すべきか。長らく放置していたことを悔いる一方、読み通した達成感で満たされた。160 年前の文章であり、単語や文体に難しいものが多く含まれるが、大筋は理解できた。

このような貴重な古書がなぜ私の手許にあるのか、その経緯についても説明したい。この本はフランス・ストラスブール留学時代に知り合った友人 Anne de Reilhac から贈られたものだ。ご両親の引っ越しに際し、持ち物整理の対象となった蔵書の一冊。彼女は「これの本は Kei に譲るべき」と判断し、私が受け取ることになった。2000 年の秋、de Reilhac 夫妻の次女の結婚式に参列するため、オレロン島にある彼らの別荘へ妻と一緒に赴いた時のことである。

帰国後、読み始めたものの中々はかどらない。挿絵はつづさに見たが、本文は最初の 1 割くらいを読んだだけ。20 年間も書棚の飾りになっていたが、人生の残り時間を考えると蔵書を整理・処分する課題に直面した。手放す前に何とか自分の力で読み通すと決意したのが今年の夏。辞書を頼りに約 1 ヶ月かけて読了した。

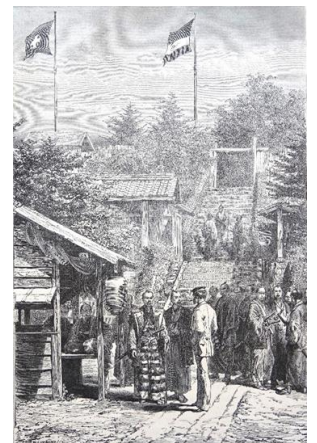
さて、この書物を譲る先だが、公立の図書館ではなく、ある個人を考えている。その人は日本人女性と結婚したフランス人で東京に住む。彼はストラスブール時代からの親友夫妻の長男、赤ん坊の時から知る縁だ。彼ならきっと有効に活用してくれるだろう。この古書がフランス語圏との文化交流に役立つことを期待する。



書籍の外観



横浜、宿舎の使用人



江戸・長応寺の宿舎入口



江戸市内 散策

法人会員紹介

ワインショップ「サン・ヴァンサン」



●サン・ヴァンサンでは、お手頃で良心的な価格の美味しいワインを店内にたくさんとり揃えております。  
●今回のおすすめは、ボルドー地方の赤ワイン「シャトー・ムーラン・イクム〈コート・ド・ブル〉2015年」です。円安になる以前にストックしていたので、とてもお値打ちな価格で上質なワインを入手することができます。心地よいベリー系の上品な香り、穏やかな果実味と優しい酸味、ほんのりとしたスパイシーな風味がバランスよくまとまっていて、大変飲みやすい仕上がりです。2015年はボルドーのあたり年で、よく熟した滑らかなタンニンを用意したヴィンテージです。

- ◆ ワイン名 : シャトー・ムーラン・イクム 〈コート・ド・ブル〉 2015年
- ◆ 産地 : ボルドー地方
- ◆ 希望小売価格 : 2,420円 (税込)
- ◆ 特別価格 : 1,650円 (税込)

住所：奈良市学園朝日町 2-2 米田ビル 102  
電話：0742-43-3832  
定休日：毎週月曜、第2・第3火曜  
営業時間：11:00～19:00  
店長：竹中宣人 (たけなか のりひと)

《2024年度第4回理事会報告》…事務局

日時：2024年9月19日(木) 15:00～17:00。場所：野菜ダイニング「菜宴」。  
出席者：三野、浅井、高松、菌田、杉谷。議題1. 会員数確認。議題2. 7/18理事会後の活動：なし。議題3. 今後の行事：(9/22) 秋の教養講座—講師ピエール・シルヴェストリ、(9/29) 第64回シネクラブ例会『自由の幻想』、(10/27) ガイドクラブ「霊山寺バラ園散策」、(2/11) 2025年度総会—会場「菜宴」。議題4. 30周年記念行事：(11/24) 記念式典、記念誌—創立時メンバー、現在の活動の発端の紹介他。議題5. Mon Nara 通信 No.19、Mon NaraNo.306 10/14 発送予定。議題6.その他：次回理事会 11月14日(木) 15:00～16:30「菜宴」にて。



編集後記 ☆「秋明菊 (シュウメイギク)」は古い時代に中国からもたらされ、すっかり日本に定着した花です。フランス語名は «Anémone du Japon»、和訳すると「日本のアネモネ」になります。正確な由来はわかりませんが、フランスに渡ったのが原産国の中国からではなく日本からだったために、こうした命名がなされたのでしょうか？ 日本名には「菊」の字が用いられていますが、実際にはキク科ではなくキンポウゲ科の植物です。「アネモネ」を用いるフランス語名のほうが植物学的には正確なもの面白いところです。☆60～90センチと丈が長く、細い茎の頂部に、ちょこんと乗っかるようにして可憐な花を咲かせます。風が吹いて茎と花がゆらゆら揺れると独特の優雅な風情がただよい、秋を感じます。☆花には白や薄いピンクや濃いピンクがありますが、わたしは爽やかな白色に惹かれます。とはいえ、花びらのように見えているのは花ではなく萼とのこと。それを知ってからも、茎の下の方で袴を広げているような大きな葉、ノッポで曲線的でスタイリッシュな茎、すずしげな白色の萼、これら全体で「秋明菊の花」が形作られているように感じます。ところが近年は温暖化のせい、いつの間にか、わが庭に咲いていた秋明菊の姿がみられなくなりました。ふとその不在を感じた時、秋が遠のいてしまったようで、さみしい気持ちになります。(N. Asai)

- ◆当協会では**会員を募集**しております。お申込み、お問合せは下記事務局まで。
- ◆本誌への投稿、特に新鮮で多様な話題、直近のフランス情報などを歓迎します。誌面の都合でご相談のうえ、表現を変えさせていただくことがあります。Mon Nara 2025年2月号は**1月30日**が原稿締切日です。
- ◆会員のみなさまで「**Mon Nara**」(2月、6月、10月発行)又は「**Mon Nara 通信**」(4月、8月、12月発行)に**チラシ同封を希望される方は**、1) 内容がフランスに関わるもの、2) 本人または代理人が発送作業に参加、の二つの条件を満たせば同封可能ですので、下記事務局までお問い合わせ下さい。

Mon Nara 2024年10月号 numéro 306

奈良日仏協会 Association Franco-Japonaise de Nara

HP : <http://www.afjn.jp> E-mail : [nara.afj@gmail.com](mailto:nara.afj@gmail.com) FAX : 0742-62-1741

〒630-8226 奈良市小西町19 マリアテラスビル 2F 野菜ダイニング菜宴[郵便物のみ] 発行責任者：三野博司